

宗教民俗とコミュニケーション

—講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」をめぐって—

山崎 亮*

Makoto YAMAZAKI *

Traditional Religious Customs and Communication

「世代間コミュニケーションと教育」プロジェクトの一環として、小論では宗教民俗⁽¹⁾の事例を取り上げる。まず、1において、私の講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」を誌上で再現し、出雲地方の伝統的な宗教民俗の一端を報告しながら、神々に対する日本的な感覚を一瞥する。その上で、2において、フランスの聴衆を対象にしたこの講演をコミュニケーションという観点からとらえ直し、とりわけ世代間（伝統）と異文化間の問題として、若干の考察を加える。

およそ人間の生活はコミュニケーションなしには成り立ちえないが、宗教現象においてはごく一般的に考えてみても、1)神々や仏など「聖なる」存在が属する超越的次元の世界と「俗なる」人間との間、すなわち聖俗間、2)宗教文化を継承し、その伝統性を支える世代間、3)同時代の異質な宗教伝統の間のいわば異文化間という、少なくとも三つのコミュニケーションの位相を区別することができるだろう。

小論では、このような宗教現象におけるコミュニケーションの位相に関連して、私が2007年5月10日にフランス・アルザス地方のコルマル（Colmar）市で一般市民を対象に行なった講演 "Les divinités du Japon : les mythes et les cérémonies de la région d'Izumo" 「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」⁽²⁾を素材として、若干の考察を試みたい。この講演で私は、「神々の国」として位置づけられてきた出雲地方の独特な宗教民俗の現状を、記紀以来の「出雲神話」との関連にも説き及ぶつつ、多数の写真を用いながら具体的に紹介し、これを通じて、現代日本人に通底すると思われる神々に対する感覚の一端を、現代フランスの聴衆にもリアルに理解できる形で浮かび上がらせようと努めた。この試みがどの程度まで成功したかは措くとして、伝統性を本質的特徴とする宗教民俗を扱った講演内容、ならびにフランスの一般市民を聴衆とする講演形式の両面を契機として、1)聖俗間、2)世代間、3)異文化間のコミュニケーションの問題に触れることにする。本号の「序文」で提示された分析枠組みに従うならば、小論で扱う2)世代間コミュニケーションの問題は、地域社会という特定の間人間関係における時間的な「つながり」という側面をもち、これに対して3)異文化間コミュニケーションの問題は、日仏社会

の不特定な人間関係における空間的な「つながり」を対象にしている、と総括することもできるだろう。ともかくも、まずは講演の内容をできるだけ忠実に再現するところから出発しよう。

1 講演「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」

はじめに

私は、日本の島根大学の教授で、山崎亮と申します。今年の1月から半年間、マルク・ブロック大学日本学科の客員教授として、ストラスブールに滞在しております。今日は、「日本の神々：出雲地方の神話と祭礼」と題しまして、多くの写真を見て頂きながら、日本の伝統的な宗教、とくに神道と「民間信仰」について紹介したいと考えています。

日本の伝統的な宗教というと、みなさんのなかには、おそらく、仏教あるいは神道を思い浮かべる方がたくさんおられるのではないかと、思います。その一方で、日本人の大半は無宗教だ、という言い方もよく耳にします。実際、キリスト教や仏教など、特定の宗教を自覚的に信仰している日本人はかなりの少数派だといえます。けれども、たとえば今でも60%の家庭に仏壇——仏像や先祖の名前を書いた位牌を安置する壇。ロウソクが灯され、供物が供えられる——や神棚——主に神社の札を安置する棚——があるという事実からも分かるとおり、日本人が日常生活のなかで、神や仏——日本の場合、仏は、如来や菩薩など仏教における信仰対象を指す言葉であると同時に、死者、さらには先祖を指す言葉でもある——に触れる機会は、まだまだ多くあります。自覚的な信仰ではないけれども、いわば無意識のうちに身につけている宗教的な感覚が、多くの日本人には今なお共有されていると考えられるのです。

たとえば私は、「民間信仰」の調査のために、よく日本の田舎の山道（はこら）を歩いたりしますが、そこには必ずといっていいほど、祠や仏堂——神仏を祀る小さな建物——や、注連縄——藁で作った縄に紙垂（しで）と呼ばれる一定の形に切った白い紙を付ける。神がそこにいることを示すしるしとなる——を張った神木——神が宿る木——、あるいは赤いよだれかけをまとった地蔵——ももとは仏教の菩薩の一種だが、日本では独自の解釈のもとで、多様

* 島根大学法文学部

な形態を取りながら、最も身近な仏となっている——などが見られます。山中を歩く人々を、眼に見えない無数の神や仏が守ってくれている、そんな感覚があります。ところが、私はストラズブルに来てから、ヴォージュ⁽³⁾の山中をハイキングした経験がありますが、そこには当然のことながら、小祠や神木や地蔵は、一切ありません。私自身は自覚的な信仰を持たず、不可知論者(agnostique)⁽⁴⁾を自認してきましたが、それでもヴォージュの山道に小祠や神木が全くないのは、何か物足りないような寂しい感じがしました。それは、神や仏の加護が一切望めない状況で覚えた一種の不安感だったのかもしれないし、その意味では私は、無意識のうちにもアニミズムの信奉者(animiste)だったのかもしれない。

この講演では、神々に対する日本人のこのような感覚を、私が住んでいる島根県東部、出雲地方の神道や「民間信仰」の祭礼行事を通じて、皆さんに具体的に紹介したいと思います。もちろん、それらは日本の片田舎の小さな行事ですが、そこには神々に対する日本人の感覚がきわめてリアルに表われていると思われるからです。

それでは、日本人にとって神とは、どのような存在なのでしょう。江戸時代の有名な国学者である本居宣長は、日本の神を次のように規定しています。「何にまれ、尋常ならずすぐれたる徳のありて、可畏き物(どのようなものであっても、普通のものとは異なって優れた性質をもつ、近づきたいもの)」。これは、日本人にとっての神々の性格を、きわめてよくつかんだ規定といえます。実際、日本人にとっては、原則的にはどんなものでも神となりうるのであって、たとえばアマテラスやスサノオ、オオクニヌシのように、『古事記』『日本書紀』——いずれも8世紀に編纂された日本最古の歴史書——に現われる古典的な神から、自然現象、たとえば山や川を神として祀る自然神、一族の祖先を神として祀った氏神、恨みを残して死んだ人間が祟りとして災いをもたらす御霊神、功績のあった人間を死後に神として祀る——たとえば戦国時代の英雄である豊臣秀吉(豊国神社)、江戸幕府を開いた徳川家康(日光東照宮)——等々、実に多様です。日本では、このように多様な由来をもつ神々が数え切れないほど存在して——一般に八百万の神と呼ばれる——、大小さまざまな神社に祀られ、あるいは何かの機会に神々の世界から到来するのです。一方で、眼に見えない神を示すために、日本では神が宿る依り代——物質的な象徴——が、多様に発達してきました。神はたとえば木や岩に宿ったり、御幣のような人工物に宿ったり、あるいは人間や動物に神が憑依して(乗り移って)現われることもあります。

日本人の宗教には、もちろん仏教も大きな役割を果たしていますが、仏教は現在では葬式や墓のあり方など、死者祭祀に密接に結びついていて、別に検討しなければならない大きな問題群を形成しています。この講演では、もっぱら神道と「民間信仰」を中心に、日本人の宗教のあり方を考えてみたいと思います。

(1) 出雲地方と神話

まず、本講演の副題にあります「出雲」という言葉から説明していきたいと思います。これは、江戸時代までの古い地名で、現在の島根県の東部のことを指しています。お手元の資料の地図を御覧ください(61頁参照)。島根県は、本州の西部、広島県の北にあり、日本海に面しています。現在は人口74万弱、過疎化が進んで、高齢化率——65歳以上の高齢者が人口に占める割合——が日本で一番高い(27.6%)県です。県庁所在地は、県の東部にある松江市で、人口は20万弱、私が勤務する島根大学もこの松江市にあります。奈良時代から明治維新に至るまで、出雲は行政区分としての「国」を表わす言葉として用いられていました。島根県は今でこそ過疎に悩む小さな県ですが、そのなかでも出雲地方は、古代には中国や朝鮮半島との交流の表玄関にあたり、日本のなかでも政治的・文化的に先進的な地域の一つでした。たとえば、1984年に発見された荒神谷遺跡では、358本にも上る銅剣——これはそれまでに日本全体で発掘された銅剣の総本数よりも多い——が発掘され(写真1)、さらに1996年には荒神谷遺跡の近くの加茂岩倉遺跡で、これも一つの遺跡から見つかったものとしては日本で最多の39基の銅鐸——もともとは祭で鳴らす一種の楽器だったものが、やがて権威の象徴として重視されるようになったと考えられる——が発掘されています(写真2)。銅剣も銅鐸も、いずれも青銅で作られ、当時としては富と権力の象徴とみなされていましたから、両者が多数埋められた1世紀前後の出雲には、かなり大きな政治勢力がすでに存在していたことが明らかとなっています。

さて、この出雲地方に特徴的なことは、この地方にまつわる「出雲神話」が、『古事記』や『日本書紀』の記述において大きな役割を果たしていること、また、古代の地誌として各国で作成された『風土記』のなかで、唯一完全な形で伝えられている『出雲国風土記』のなかにもさまざまな神話が記されていることです。古代から出雲地方は「神々の国」なのであり、もちろん、中世・近世を経て、神々に対する感覚も変化しているはずですが、しかし「出雲神話」はいわば「生きた神話」として、現在も受け継がれています。

たとえば『古事記』では、死んだ妻のイザナミという女神を追って、夫のイザナギの神が死者の国である黄泉国^{よみのくに}に赴く場面があります。お手元の資料にある、神々の系譜の略図を御覧になりながら、話を聞いて頂きたいと思います(60頁参照)。結局、死者の国である黄泉国の住人となって醜くなってしまった妻のイザナミを見て、夫のイザナギは慌てて地上の世界=葦原中津国に逃げ帰ってきます。地上に戻ってきたイザナギは、黄泉国への入り口である黄泉平坂に大きな岩で蓋をして、追いかけてくる妻のイザナミから逃れます。そのあとイザナギは、死者の国に行って穢れてしまった自分の身体を浄めるために禊^{みそぎ}——水浴び——をしますが、その時飛び散ったしずくからアマテラスとスサノオという姉と弟の神が誕生します。この2柱の神が『古事記』のその後の神

話の展開において重要な役割を果たすのですが、話を元に戻しますと、死んだ妻のイザナミの墓（写真3）も、黄泉平坂にイザナギが蓋をした大岩（写真4、5）も、現在も松江市の近くに存在しているのです。

あるいはまた、『出雲国風土記』の冒頭には、「国引き神話」と呼ばれる有名な物語が置かれています。これは、出雲の国はもともと小さかったので、ヤツカミズオミツという神が、はるか海の彼方から、よその地方で余っている国土に太い縄をかけて「国よ来い、国よ来い」とかけ声をかけながら引き寄せて、出雲の国を今のように大きくした、という話です。ヤツカミズオミツの神は、国引きの力仕事が終ると、「おゑ（これで終わった）」と言って持っていた杖を衝きますが、その杖が一本の木になった、と『出雲国風土記』には記されています。ところが、この木もまた、「意宇の杜」として現存しているのです（写真6）。この「意宇の杜」は、松江市の私の宿舎から自転車で10分ほどのところにあり、今から12年前、私が島根大学に赴任して来て最初にこの木を見たときには、まさに古代の神話が現在も生きている、と感動したものでした。

もちろん、今ある「黄泉平坂」も「意宇の杜」も、実際には、江戸時代後半の国学——一言でいえば日本の民族主義・復古主義を強調する思想——の興隆を背景として、近世末、さらには近代になって作り出されたものです。また中世にも、『古事記』や『日本書紀』の神話に関する出雲地方独自の解釈が存在しました⁽⁵⁾。このように、時代とともに神話の内容や解釈は当然移り変わっていくわけですが、それでもなおかつ神話の伝承が連綿と受け継がれていくところに、出雲地方のユニークさを見出すことができます。そしてそれは、そもそも『古事記』や『日本書紀』のなかで、「出雲神話」が大きな役割を果たしていたからにはほかなりません。

とくに『古事記』の記述を中心に、日本の古代神話のおおざっぱな流れを簡単に確認しておきます。先ほどの神々の系譜の資料をもう一度御覧ください。最初に活躍する神が、先ほども出てきました夫のイザナギと妻のイザナミで、この2柱の神は、夫婦の営みによって次々と島を産んで、日本の国土を現在の形に整えていきます。これを「国生み」と言います。ところが妻のイザナミが死んでしまい、残されたイザナギの禊の際のしずくから、アマテラスとスサノオが生まれたことは、先ほども述べました。弟のスサノオは乱暴者で、姉のアマテラスを困らせ、ついに神々の世界＝高天原から地上の世界＝葦原中津国に追放されてしまいます。こうしてスサノオが降り立った地点が、出雲の奥地、斐伊川という大河の上流で、そこでは八岐大蛇という、頭が八つ、尾が八本ある巨大な蛇が、人々を困らせていました。スサノオはこの八岐大蛇を退治して土地の神の娘と結婚し、葦原中津国を治めることとなります。その子孫に、先ほどの「国引き神話」のヤツカミズオミツやオオクニヌシが現われるのですが、要するにスサノオの系譜の神々は、出雲地方を中心に活躍するのです。一方、アマテラスもやがて、

自分の子孫に葦原中津国を支配させたいと考えるようになります。アマテラスが代表する高天原の神々とスサノオの子孫であるオオクニヌシとの間に、さまざまな確執が生じますが、最終的にオオクニヌシはアマテラスの孫であるニニギに葦原中津国を譲ることを決心します（国譲り）。その代りに、自分のために立派な宮殿を造ってくれ、とアマテラスに頼んで、そこでできたのが出雲大社だ、とされます。出雲大社という神社については、すぐ後で説明します。こうしてアマテラスの息子であるニニギが葦原中津国に降臨し、支配することになります。さらにその子孫の神武天皇が、初代の天皇として日本全体を統治するようになった、とされるのです。

このように記紀神話は基本的に、アマテラスの直系の子孫である天皇家が日本を支配することを正当化するための神話と見ることができそうですが、そのなかで、スサノオやオオクニヌシなど、出雲地方に密接に関係する神々が、重要な役割を果たしているわけです。

（2）神々の集い——出雲大社の「神在祭」

さて、以上の簡単な説明でもお分かり頂けたと思いますが、出雲地方の神々に対する信仰や祭礼を考えていくうえで、オオクニヌシを祭神とする出雲大社の存在は重要な位置を占めています。出雲大社は、アマテラスを祭神とする伊勢神宮と並んで、古代から、日本を代表する神社の一つでした（写真7、8）。さらに中世以降、出雲大社は、縁結び——未婚の男女を結びつける——の神として全国的な信仰の対象になります。

出雲大社には数多くの祭礼が伝えられていますが、そのなかでもきわめて興味深い祭礼として、「神在祭」を取り上げたいと思います。この祭は、眼に見えない神々がどのようにして呼び出され、ある特定の場所に定着するのかを、明瞭に示しているからです。

日本の旧暦——明治以前に用いられていた太陰暦——の10月は、一般に神無月と呼ばれています。これは文字通り、神々がない月という意味で、旧暦10月は、全国の八百万の神が出雲に集結して、縁結びの相談をするのだ、という伝承が、中世以来日本中に広がるようになります。逆に出雲地方では旧暦10月は神在月と呼ばれています。10月は日本全国で出雲だけに神々がいるからです。この神在月に、八百万の神を迎える祭が「神在祭」なのです。

出雲大社の「神在祭」は旧暦の10月10日に行なわれます。今の新暦では、年によって日付が変わりますが、通常11月の中旬から下旬にかけて行なわれています。神々は、出雲大社の西の海の彼方からやってくるとされています。出雲大社の西には、稲佐の浜という美しい砂浜が広がっており、その一角に笹竹を立て注連縄を張って斎場——祭を行なう場所——が準備されます（写真9）。夜になると、海に向かって庭火が焚かれ、神々を招きます（写真10）。日本では古来、夜に火を焚くことによって、眼に見えない神々や死者の霊を引き寄せることができると考えられているのです。神職たちが祝詞——神々に対

する祈りの言葉——を唱えるなかで、神々は、神籬ひもろぎと呼ばれる、常緑樹の枝に紙垂を垂らした依り代に宿ることになります。神々が宿った神籬は、横笛と太鼓の奏楽とともに、出雲大社まで町内を巡行します（写真11）。その先頭に行くのは、八百万の神々の先導者と信じられている龍蛇です（写真12）。これは、11月ごろ、日本海を北上してくるセグロウミヘビの剥製です。出雲大社に到着した神籬は、最終的に、東西二つの十九社まで、神々を連れて行くことになります（写真13、14）。十九社は、これから7日間、日本全国から集った神々の、いわばホテルとなるのです。出雲の人々は、この1週間、出雲大社に参れば日本全国の神々を一度に拝むことができることを知っているのです、いつもよりも多くの人が参拝に訪れます（写真15）。

神籬は、古来から神々の依り代として用いられてきましたが、出雲大社のこの「神在祭」は、眼に見えない神々が依り代に宿って移動するという日本の神々の性格を、よく表わしていると思います⁽⁶⁾。

（3）人に憑く神——美保神社の「青柴垣神事」

さて、次は、島根半島の東端、出雲大社とはちょうど反対側に位置する美保神社あまふしがきの、「青柴垣神事」と呼ばれる祭礼を見てみましょう。美保神社は、オオクニヌシの息子であるコトシロヌシと、その母親であるミホツヒメの2柱の神が祀られていて、2棟の本殿が連結された、珍しい建築様式を示しています（写真16）。美保神社も古くからの神社で、複雑な祭礼が数多く行なわれますが、4月7日に行なわれる青柴垣神事は、そのなかでも1ヶ月ほどの準備期間が必要な、最も複雑な祭礼です。この神事は基本的には、『古事記』に記された「国譲り」の1シーンを表わしたものとされています。

祭礼の当日、神事が行なわれる建物の前には注連縄が張られ、さらに、神が降り立っていることを示す「オハケ」が立てられます（写真17）。建物のなかには、祭神のコトシロヌシとミホツヒメのそれぞれに対応する、「当屋」と呼ばれる二人の男性が籠もっています。実はこの当屋には、それぞれコトシロヌシとミホツヒメの神が憑いて（乗り移って）いる状態なのです。人々は、直接当屋に向かって礼拝し、賽銭——日本では神仏への供物としてお金を供えることが多く、これを賽銭と呼ぶ——を投じます（写真18）。当屋はこのとき、神そのものなのです。やがて、当屋たちは神社から200メートルほど離れた港の方に歩いていきます。神懸かり状態なので、自分一人では歩くことができず、まわりの人が支えながら進んでいきます（写真19）。途中、観衆は当屋もっている扇子を先を争って取ろうとします。神が直接触れた扇子なので、御利益がある——それをもっていると幸福が訪れる——と信じられているのです。当屋の手にある扇子が取られてしまうと、隣にいる係がすかさず新しい扇子を当屋に手渡します。港に辿り着くと当屋たちは、用意された「御船」に乗り込みます。「御船」は沖合に進み、また戻ってきます（写真20）。このシーンが祭のクライ

マックスで、オオクニヌシの息子であるコトシロヌシが国譲りを受諾するところを表わしているとされています。上陸した当屋たちは再び美保神社の拝殿まで行列を作って進み（写真21、22）、そこで鉾——槍の一種——を持って舞います（写真23）。ここでコトシロヌシ、ミホツヒメの2柱の神はようやく、当屋から離れ、本殿に戻ることにになります。

この「青柴垣神事」では、神は、一貫して人間に憑依しています。これもまた、眼に見えない神々が、眼に見える形で人々の前に現われ、人々と交流しながら移動する典型例と見ることができます⁽⁷⁾。

（4）正月に来る神——島根半島の小正月行事

ここまでは神社の大きな祭礼を見てきましたが、今度はいわゆる「民間信仰」の年中行事——毎年決まった日時に行なわれる行事——として、小正月をとりあげます。もともと日本の伝統的な「民間信仰」では、正月は1年でも最も大切な行事のひとつですが、1月1日を中心とする大正月と、1月15日を中心とする小正月に分かれます。正月は、年神としがみあるいは歳徳神としとくじんと呼ばれる、それぞれの家を1年間守ってくれる神を迎える行事なのです。

正月は、日本人にとって今でも特別な期間として意識されています。たとえば、不可知論者の私の宿舎でも、近所のスーパーから買ってきた注連飾り——稲藁で作られた注連縄の一種——を飾り、鏡餅——餅米＝特殊な米を蒸して練り上げたもの——を供えます。注連飾りは年神が家のなかにいることしるしですし、鏡餅は年神への供物です。自動車に注連飾りを付ける人もいます。出雲地方にかぎらず日本の都市部でも、このように伝統的な慣習はまだ広く残っていますが、ただ、そのもともとの意味を知る人は少なくなっているように思われます。

歳徳神を祀る伝統的な小正月行事を見てみましょう。松江市の北に位置する島根半島の漁村では、伝統的な小正月行事がまだ盛んに行なわれています。その中心となるのが、注連飾りなどの正月飾りを焼く、トンドと呼ばれる行事です。この集落ではトンド行事は早朝に始まりますが、準備はその前日から行なわれます。まず、山から竹を掘り出し（写真24）、種々の飾り物を作り（写真25）、歳徳神の神輿（＝神の乗物）が倉庫から出され（写真26）、さらに餅を搗いて神輿の前に供えます（写真27）。翌朝6時頃、いよいよトンドの行事が始まります。この集落は東組と西組の二つの地区に分かれ、漁港の広場にそれぞれの地区毎にトンドが立てられます。前日準備した竹に飾りを付けて立て、その下に注連飾りなどを置きます（写真28）。東組と西組の神輿がトンドのまわりを回って競争する間に、トンドに火が付けられます（写真29、30）。この火で焼いた餅や魚を食べると、1年間、病気にかからない、と信じられています（写真31）。さらに人々は、歳徳神の神輿に海藻を供え、拝礼します（写真32）。夜が明けて2基の神輿は集落のなかを練り歩きます（写真33）。神々が神輿に乗って集落を巡回するのは、そもそも日本の祭には神酒——神に供えられた、

米から作られた日本酒——が欠かせませんが、この神輿を担いでいる人々も、神酒を飲み続けながら練り歩くので、昼前に行事が終るころには、皆べろんべろんに酔っぱらってしまいます。

このような小正月行事では、地域の人々が一緒になって歳徳神を迎え、ともに神酒を飲み、トンドを立てて神輿を担ぐなかで、神の加護と1年間の無病息災を祈り、さらには自分たちの連帯感を高めているのだ、とみることができるでしょう⁽⁸⁾。

(5) 荒ぶる神の末裔——松江市近郊の荒神祭祀

次に、小正月行事と同様の「民間信仰」の一環で、秋から初冬にかけての出雲地方の代表的な祭礼として荒神の祭を取り上げます。この季節になると、出雲地方では稲藁を田で焼く青い煙が漂うようになり、それぞれの神社の境内や奥まった杜のなかで、神木に藁蛇が巻き付けられ、多くの御幣が刺されている光景をよく眼にします。私の宿舎のすぐ近くでも藁蛇が巻き付けられた大きなスダジイを見ることができます(写真34)。これが、出雲地方で盛んな荒神祭祀の名残なのです。

荒神は、もともとは「荒ぶる神」(荒々しい神)と呼ばれ、崇りをなす怖ろしい神のことを指していました。しかし現在の荒神の祭には、そのような荒神の怖ろしい側面はあまり感じられません。むしろ、藁蛇を皆が一緒になって作るという点に力点が置かれた祭と見た方がいいと思います。いずれも松江市近郊のいくつかのケースを見ることにしますが、藁蛇は、どこでも、作るのが最も難しい頭部から作り始められます。本来蛇にはないはずの歯も立派に生えていて、あるいはこれは龍をイメージしているのかもしれませんが(写真35)。頭部が完成するとこれに胴体が付けられます。胴体部分ははしごを使い、二人がかりで藁束を縛っていくのです(写真36)。この作業の間にも、御神酒は欠かせません。藁蛇が完成すると、これを担いで集落内を練り歩きます(写真37)。次いで集落内の定まった場所にある神木に藁蛇を巻き付けます。そのやり方は集落によって様々ですが、なかでも興味深いのは、昨年までの藁蛇を取り除かずに、その上に新しい藁蛇を積み重ねていくやり方です(写真38)。写真の集落の場合、毎年安置された藁蛇が堆積して1メートルほどの土壇状になっています(写真39)。この土壇には、一体いくつの藁蛇が重層していることでしょうか。土壇の厚さは、そのままこの集落における荒神祭祀の伝統の厚みを表わしているのです。最後に、藁蛇にも神職が神酒を飲ませ(写真40)、まさに神人が宴席を共にして、祭は終わります。

ところで、藁で蛇を作る技術の背景には、以前は農家の藁仕事——藁で注連縄やワラジや蓑など様々な日常生

活の必需品を作る——がありました。その意味で、出雲地方の荒神祭祀は、基本的に農業＝稲作に密接に関連しており、実際、かつては様々な性格を持っていた荒神も、今ではもっぱら農業の守護神として信じられています。ところが、生活の都市化・近代化が進展する状況のなかで、藁仕事の技術がもはや失われ、とりわけ難しい頭部の製作ができなくなってしまった集落もたくさん出てきました。なかには、伝統行事としての荒神祭祀をなんとか受け継いでいきたいという地元住民による苦肉の策として、頭部だけ石像にし、毎年荒神祭祀には細くて短い藁蛇のしっぽだけを作ってすませるところも出てきています(写真41)。

このように、伝統的な荒神祭祀にも変化が生じていますが、いずれにせよ集落の人々が一緒になって、神酒を飲みながら藁蛇を作り、神木に巻き付け、豊作を祈願する過程で、この祭でも人々の連帯が再確認されていくのです⁽⁹⁾。

おわりに

以上、出雲地方の神事と「民間信仰」の行事を見てきました。「神在祭」や「青柴垣神事」では、眼に見えない神々が、神籬や当屋となった人間など、さまざまな依り代によって可視化され、祭のなかに現われる様子を理解していただけたのではないかと思います。また、1年間を守護してくれる歳徳神や、農業の守護神としての荒神を、地域の共同体で祀る素朴で伝統的な祭礼も御覧頂きました。日本民俗学の創始者である柳田国男は、『日本の祭』(1942年)という有名な本のなかで、長い歴史を通して日本の祭礼は多様な形で発展していったが、その原点は、人間の共同体と神との絆を定期的に再確認するところにあった、と述べています。とくに、本講演の後半で見てきた小正月行事と荒神祭祀は、柳田のこのような見解を裏付けるものであるように思われます。さらにその背景には、神々に対する自覚的な信仰というよりも、人々が神々と共にあるという、一種の自然な感覚が存在しているのです。

もちろんこれらの祭礼は、「神々の国」と呼ばれる出雲地方という、ある意味では特別な地域にみられるものであり、日本のどこでも、このような祭礼が現に行なわれているわけではありません。ただ、正月の初詣——正月三ヶ日に、1年間の幸福を願って神社や寺院に参拝すること——に、毎年1億人近い人出があるという日本社会の現実、この出雲の例に見られるような、神々が身近にいるという感覚が、やはり無意識のうちにも現代日本人の心に宿っていることを示している、とはいえないでしょうか。

日本の神々：出雲地方の神話と祭礼（資料）

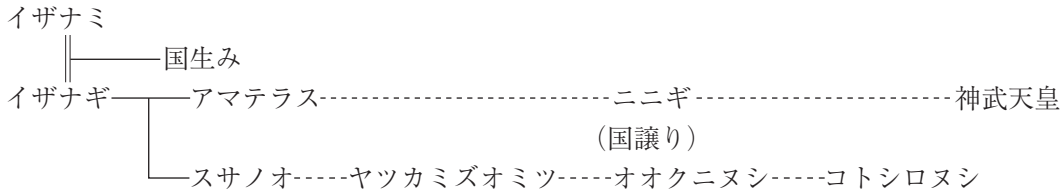
はじめに

- ・神々の感覚
- ・国学者本居宣長による神の規定＝「何にまれ、^{よのつね}尋常ならずすぐれたる^{こと}徳のありて、^{かしこ}可畏き物（どのようなものであっても、普通のものとは異なって優れた性質をもつ、近づきがたいもの）」ex.^{やおよろず}八百万の神
- ・神の依り代^{こへい}ex.御幣

1 出雲地方と神話

(1) 関連する日本古代の文献→『古事記』（712）、『日本書紀』（720）、『出雲国風土記』（733）

(2) 神々の系譜



(3) 古代日本人の世界観

^{たかまがはら}高天原（＝神々の世界）
^{あしほらなかづくに}葦原中津国（＝人間の世界）
^{よみのくに}黄泉国（＝死者の世界）

- ※葦原中津国と黄泉国の境＝^{よもつひらさか}黄泉平坂
- ※国引き神話→^{おおう}意宇の杜

2 神々の集い——出雲大社の「^{かみありさい}神在祭」

- ・出雲大社（オオクニヌシを祀る）、^{かみありづき}神無月と^{じゅうくしや}神在月、^{ひもろぎ}十九社、神籬、龍蛇

3 人に憑く神——美保神社の「^{あおふしがき}青柴垣神事」

- ・美保神社（コトシロヌシを祀る）、国譲り神話、オハケ、当屋

4 正月に来る神——島根半島の^{みこし}小正月行事

- ・トンド、年神（^み歳徳神）、^み神輿、^み神酒

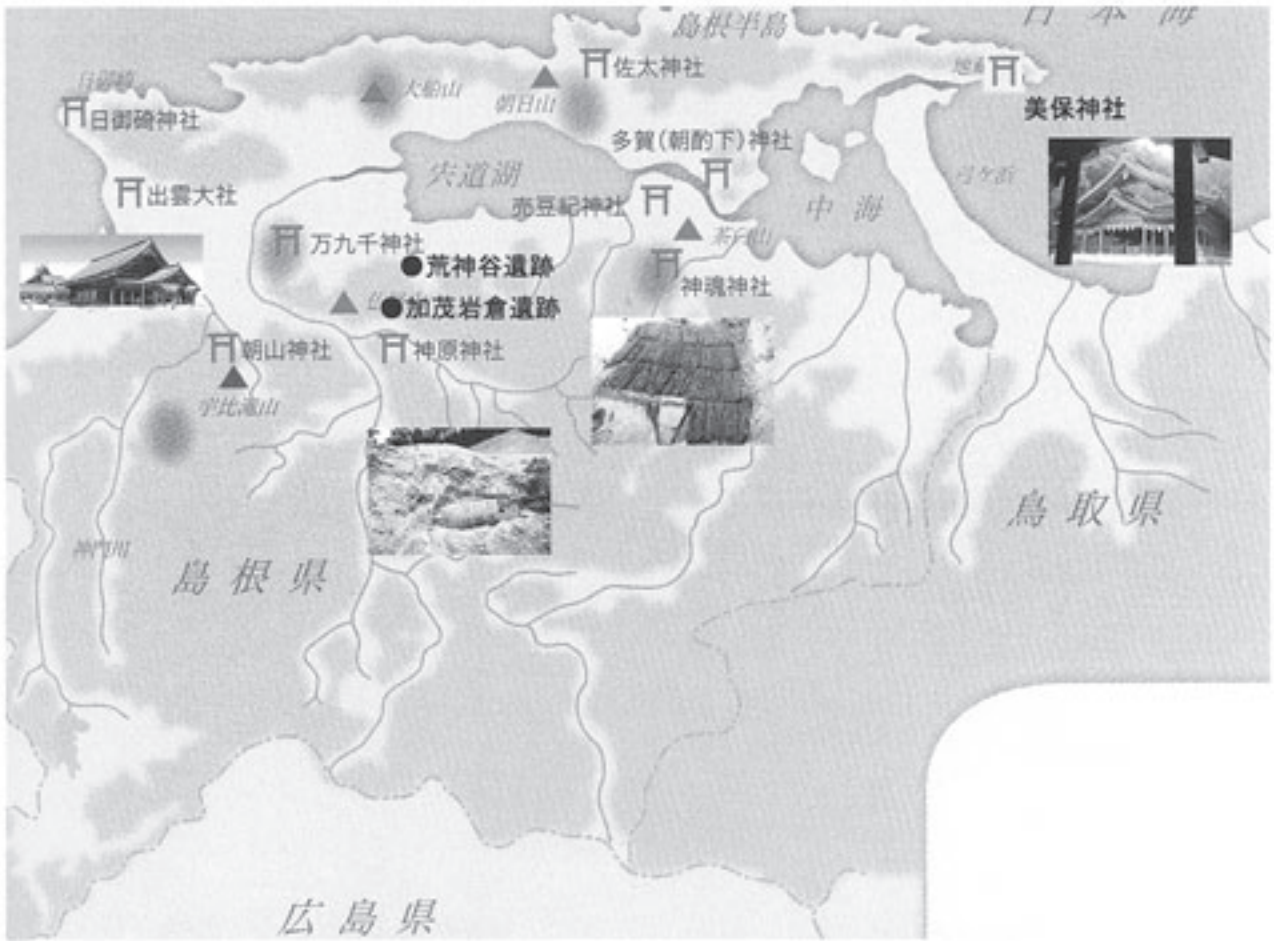
5 荒ぶる神の末裔——松江市周辺の^{あらい}荒神祭祀

- ・祟り、神木、^{あらい}藁蛇、^{あらい}藁仕事

おわりに

- ・柳田国男『日本の祭』（1942）→祭＝神々と共同体との絆を定期的に再確認する。
- ・人間が神々と共にあるという感覚が、無意識のうちにも日本人の心に宿っている。

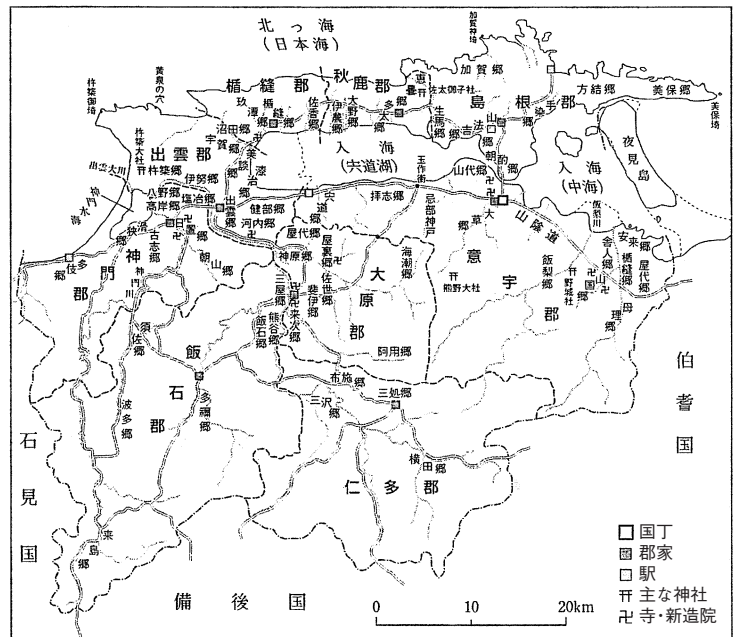
※これは、講演当日に配布したフランス語資料の日本語原稿である。



島根県位置図

島根県のデータ

- 面積 6,707.12平方km
- 人口 749,157人(平成16年)
- 県の花 ボタン
- 県の木 クロマツ
- 県の高 ハウチウ
- 県のお魚 トビウオ
- 観光客数(平成16年)
 - 出雲大社 2,094千人
 - 鳥居ワイナリー 1,056千人
 - 日御碕 1,024千人
 - 大賀谷稲成神社 840千人
 - 石見海浜公園 722千人



●—出雲国風土記地図

※紙数の都合上、日本の読者には必要がないと思われる写真は割愛した。なお、1と2の写真は島根県古代文化センターから提供を受けたものであるが、それ以外はすべて私が撮影した写真である。



1. 荒神谷遺跡の銅剣発掘現場



5. イザナギが黄泉平坂に蓋をしたと伝えられる岩



2. 加茂岩倉遺跡で発掘された銅鐸



6. 意宇の杜と伝えられるタブノキ



3. イザナミの墓と伝えられる塚



7. 出雲大社の拝殿と本殿



4. 国道9号線沿いにある黄泉平坂の看板



8. 本殿の東側にある十九社



9. 稲佐の浜に設けられた斎場



13. 出雲大社の境内で二手に分かれる神籬



10. 庭火が焚かれ、神々が呼び出される



14. 東側の十九社に神々が鎮座するところ



11. 町内を巡行する神籬



15. 神在祭の期間中に十九社に参拝する人々



12. 神籬の前を行く龍蛇



16. 美保神社の拝殿と本殿



17. 神事会所の前に立てられた「オハケ」



21. 「御船」から当屋たちが上陸する



18. 当屋の前に供えられた神酒と賽銭



22. 拝殿までの行列



19. 移動する当屋



23. 当屋の奉幣の儀



20. 沖合に進んだ「御船」



24. トンド用に竹を掘り出す



25. 準備されたトンドの飾り物



26. 神輿の準備



27. 神輿に供えられた餅と神酒と魚



28. 立てられたトンド



29. 東西両組の神輿の競争



30. トンドへの点火



31. トンドの火にあたりにくる人々



32. 神輿に海藻を供えて拝礼する人々



33. 神輿の巡行＝「宮練り」



37. 藁蛇の巡行



34. スダジイの大木に巻き付けられた藁蛇



38. 新しい藁蛇を据え付ける



35. 藁蛇の頭部



39. 堆積した古い藁蛇の上に据え付けられた新しい藁蛇



36. 藁蛇の蛇身を綯う



40. 藁蛇に神酒を飲ませる神職



41. 新しく石像化された藁蛇の頭部



45. 石製の台まで枝に挿した円盤を持って移動



42. 教会の背後の山の上でシーヴェシュラーヴェは行われる



46. 台に打ち付けて円盤を飛ばす



43. シーヴェシュラーヴェで用いられる木製の円盤



47. 同上



44. 焚き火で円盤を赤熱させる



48. 同上

2 考察——聖俗間、世代間、異文化間の コミュニケーションをめぐって

さて、以上の講演との関連で、宗教民俗とコミュニケーションという観点から若干の検討を加えてみたい。

まず、講演で取り上げた出雲地方の神話と祭礼は、冒頭で触れた1) 聖俗間コミュニケーションの典型例である。記紀以来の「出雲神話」は、スサノオやオオクニヌシ、コトシロヌシらの神々と出雲地方との「つながり」を示すものであり、この関係が明示的にせよ暗示的にせよ背景となって、この地方では現在も神々と人々との間で定期的な交流＝コミュニケーションが計られている、と見ることができる。不可視の神々は、祭礼のそれぞれの場面において、神籬、人間、神木や藁蛇、神輿といった物質的具象によって可視化され、人々の面前に顕現する。人々は神々の顕現に立ち会うばかりか、神体の藁蛇を綯ったり神輿をかつぐことによって、顕現のプロセスの一端を担いさえる。もとよりこうして顕われた神々に対して、必ずしも自覚的な、あるいは熱狂的な信仰が注がれるわけではないが、人々は淡々と拝礼し、神々と共に巡行し、神酒を酌みかわし、祈りをささげ、利益を願う。そこでは、神々との交流が同時に、祭礼に関わる人々相互間の交流とも重なり合っている。とりわけ歳徳神を祀る小正月行事や荒神祭祀は、祭を担う小さな共同体のなかで、人々の結びつきが定期的に再確認される場面でもあった⁽¹⁰⁾。

祭を担う人々相互間の交流には、単に現時点での同時代的側面のみならず、いわば歴史的な側面をも指摘することができる。それは、神話や祭祀のあり方が世代を超えて受け継がれていく伝統性の局面といいかえてもよく、さらには冒頭で指摘した2) 世代間コミュニケーションの例ととらえることもできる。元来、宗教現象には、たとえば神の啓示であったり教祖の言葉であったり、信仰の原点となる過去の出来事や伝承を受け継ぎ、保持していく伝統性が大なり小なり必ず含まれている。講演で取り上げた出雲地方の宗教民俗の場合、とりわけこのような伝統性——過去からの継続性——が、その維持に大きな役割を果たしてきたのはいうまでもない。

ただ、そこで注意しておかねばならないことは、継承されるべき伝統の内実が、当事者の意識がどうであれ、現実には常に変容しているという事実である。記紀以来の「出雲神話」が、中世には独自の解釈を施され、あるいは近世後半の国学思潮との関連で再びクローズアップされたりしたように、その意味や位置づけが時代と共に変化してきたことは、改めて指摘するまでもあるまい。また、出雲大社の「神在祭」が現在のように稲佐の浜で行われるようになったのは1950年代後半以降のことであるし、美保神社の「青柴垣神事」でも、以前は「当筋」と呼ばれる80戸ほどの家から当屋が選ばれていたものが、1996（平成8）年以降氏子全体に範囲が拡大されている。御津の小正月行事では、祭の主催者が50戸ばかりに限定される従来の「本願」制が同じく1996年に廃止さ

れ、集落全体で祭が行われるようになってから、かえって以前よりも盛り上がりを見せるようになったという。荒神祭祀に関していえば、藁蛇を神木に巻き付ける所作は、現在の出雲地方ではごく普通に見出されるものであるが、1717（享保2）年成立の松江藩の地誌『雲陽誌』——藩領全域の荒神が4,000柱以上数え上げられている——のなかでは、1例も報告されていない。つまり、藁蛇を神木に巻き付ける所作は、近世中期以降になってから、この地域の荒神祭祀に導入された可能性が高いのである⁽¹¹⁾。さらに講演で取り上げたように、藁蛇の頭部の石像化という新たな変容も現在進行中である。このように見るならば、むしろ伝統は絶えざる変容のうちにこそ成立するという逆説の方が、実態に即しているといわねばならない。伝統的なものを固定化し、実体化してとらえることの危険性がしばしば指摘される所以でもあらう。

最後に、冒頭で指摘した3) 異文化間コミュニケーションの問題にも触れておこう。幸い、コルマルでの私の講演は、少なくとも表面上は好意的に受け止められた。地元の新聞には事前に短い紹介記事も掲載され、会場の小さなホールはほぼ満員で、ところどころで笑いがこぼれたり、たとえば荒神谷遺跡の銅剣発掘現場の写真には大きなどよめきが起きたり、聴衆の反応もまずまずであった。アルザス地方にはいくつかの日本企業が進出しており、私の講演を主催したアルザス・欧州日本学研究所（Le Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace）の所在地ということもあるのだろう、日本文化に対するコルマル市民の関心の高さが窺えた。講演後も、たとえば出雲地方の神事と「国家神道」との関係についてなど、かなり突っ込んだ内容も含むさまざまな質問が飛び出したのだが、そのなかでもとくに興味深かったのは、「民間信仰（*croyances populaires*）はいつから宗教（*religion*）になったのですか」という質問だった。これに対しては、宗教という概念をどう規定するかの問題であり、日本では、成立宗教の枠に収まりきらない「民間信仰」も、聖なる世界を前提にするという点で宗教現象に含めてとらえられることが多いのだ、と説明してみたが、質問者がそれで納得したとは思われない。フランスの、少なくとも地方に住む一般市民の間では、キリスト教などの一神教や仏教のような「高等宗教」のみが*religion*であって、この枠組みから外れた*croyances populaires*は、「迷信（*superstition*）」、あるいはせいぜいで「異教の（*païen*）」行事にすぎず、本来の宗教ではないという感覚がいまだに根強い。フランスの人々のこの感覚は、アルザス地方の*croyances populaires*の一例とされるシーヴェシュラーヴェ（*Schiveschlawe*）——ドイツ語に近いアルザス語の言葉だが、あえて日本語に訳すならば「火炎円盤打ち」とでもなるだろうか——を、たまたま私が見聞した際にも痛感したものであった。

シーヴェシュラーヴェは、アルザス地方も含むヨーロッパ中部において中世まで遡ることのできる伝統行事の一つである⁽¹²⁾。私が見聞したオフヴィレ（*Offwiller*）と

いう小さな村——ストラスプールの北西、車で1時間ほどの山間にある——では、教会の裏手の低い山（写真42）に登り、木の枝に挿した直径10センチほどの、ちょうど算盤の珠状の木製の円盤（写真43）を、焚き火で焼いて赤熱させ（写真44）、カタパルトのような石製の台に打ち付けて、下の林に向かって飛ばす（写真45-48）、というものであった。オフヴィレ村のシーヴェシュラーヴェは、2月末から3月初旬にかけての四旬節第一日曜日というカトリック暦に基づいて行なわれていたが——私が訪れた2007年は2月25日だった——、少なくとも現在は教会とは無関係の行事であり、祭を主催する村人たちも、口を揃えて「これは異教の祭で、火のついた円盤は太陽を象徴している」と説明する。キリスト教以前の太陽崇拜に由来する古い農耕儀礼の名残である、という解釈なのであろう。しかしながら現在は「異教の」神々が臨在するはずもなく、麓のテントで12枚5€の円盤を買って山に登れば、老若男女誰でも気軽に参加することができる。実際、人々はあたかもゴルフの打ちっ放しの練習場でストレスを発散させるかのように、あっけらかんと円盤を石製の台に打ち付ける。当然ながらそこには不可視の神々を可視化する物質的具象もなく、出雲地方の祭礼ならば大なり小なり漂っている神々への感覚は微塵も感じ取ることができない。このようなものが現代フランスのcroyances populairesであるとするならば、たしかにこれを宗教現象ととらえるにはかなりの無理があるだろう。

このように見てくると、宗教的なるものに対する彼我の感覚の相違は、かなり大きなものといわざるをえない。オリエンタルでエキゾチックな習俗として、日本の宗教民俗に関心を寄せることはできて——この点で一定のコミュニケーションが成立したとしても——、「異教の」神々がすっかり忘れ去られてしまったフランスの人々に、日本的な神感覚の融通無碍なニュアンスを理解してもらうのは、やはり至難の業なのかもしれない。さらにそれは、単に異文化理解の難しさというばかりではなく、宗教民俗を外から眺めて理解・解釈し、その内容をなんらかの形で発表・伝達しなければならぬ研究者にとって、程度の差こそあれ常につきまとう、他者とのコミュニケーションの問題でもあるだろう。

以上、おおざっぱではあるが、宗教民俗成立の前提となる聖俗間の交流、この交流をめぐる世代間で継承されていく宗教民俗の伝統性、さらには文化を異にする聴衆への宗教民俗の伝達、という三つの位相に触れてきた。眼に見えない神々からのメッセージが、常に正確に人々に伝わるという保障はどこにもないし、また世代を通じて、神話や祭礼は常に変容しつつ受け継がれてきた。さらに神々に対する微妙な感覚を文化的背景の異なる人々に理解してもらうことの難しさも実感される。

けれども、そもそもどのようなコミュニケーションであっても、伝え手が伝達しようと意図する内容と、受け手が実際に理解する意味内容とが完全に一致するという

ことはありえない。そのようなズレを許容しつつ、実際のコミュニケーションは成立しているものであり、あるいはむしろそのようなズレからさらに豊かな意味が紡ぎ出されていく可能性も開かれているように思われる。いずれにせよ、継承すべき規範や意味内容を固定化・実体化せず、みずからの位置を相対化しながら、さらには他者の世界観をも是認できる柔軟で寛容な姿勢こそが、コミュニケーションを成り立たせるうえで大切な基盤となるのではなからうか。

そしてそのような姿勢は、小論で取り上げてきた宗教民俗に関わる問題のみならず、世代間コミュニケーションの典型例である「教育」の場面においても、あるいはそこにおいてこそ、おそらく必要とされるはずである。

注

(1) 小論でいう「宗教民俗」とは、地域社会のなかで伝統的かつ慣習的に継承されてきた、成立宗教——キリスト教や仏教などの既定の宗教——の枠に収まりきらない信仰・宗教現象群のことを指す。それは、従来、民俗学や宗教学において「民間信仰(croyances populaires)」あるいは「民俗宗教(folk religion)」等の枠組みによって対象化されてきた現象に重なり合う部分が大きい。小論では、ともすればこれらの現象の実体化に結び付きかねない従来のリジッドな概念の使用は避け、ゆるやかなイメージとして「宗教民俗」という表現を用いたい。

もっとも、以下に転載する講演原稿のなかでは「民間信仰(croyances populaires)」の語を使用しているので、読者の混乱を招くおそれがあるかもしれない。これは、フランスの一般市民にも比較的なじみ深い表現として用いたcroyances populairesの語を、講演原稿からそのまま転載したものであって、他意はない。むしろこの講演では、もっぱら後半で「民間信仰」という表現で指示された、地域の共同体祭祀の事例のみならず、主に前半部で紹介する神社の祭礼の事例——いわゆる「神社神道」ではなく、神社と地域社会との交流のなかで継承・展開されてきた「民俗神道」とも呼びうる事例——も、広義の「宗教民俗」に含めてとらえようとしている、と理解していただきたい。

なお、「民間信仰」ないしは「民俗宗教」の概念にまつわる専門的な議論は枚挙にいとまがないが、その整理の鋭利な試みとして、池上良正「宗教学の方法としての民間信仰・民俗宗教論」（日本宗教学会『宗教研究』74-2、2000年）を参照されたい。

(2) 私は、2007年1月から半年間、国際交流基金の派遣によりストラスプールの第2大学（マルク・ブロック大学）日本学科に客員教授として赴任した。この講演は、私のストラスプールの滞在中にアルザス・欧州日本学研究所（Le Centre Européen d'Etudes Japonaises d'Alsace）とマルク・ブロック大学日本学科との共催で行われたものである。講演のお

膳立てをしていただいたマルク・ブロック大学教授Sakae Murakami-Giroux氏、ならびに私の日本語を通訳してくれたマルク・ブロック大学院生Gregory Romagnoli氏に感謝の意を表わしたい。

- (3) フランス北東部、アルザス地方とロレーヌ地方を南北に隔てる山脈。標高1000メートル級の山々が続き、山麓には数多くのスキー場やハイキングコースが整備されている。
- (4) 不可知論 (agnosticism) とは、現実の世界——人間が経験的にとらえることのできる——を超えた存在の認識可能性に対して、態度を保留する立場のことである。言葉としては19世紀後半に用いられ始めたが、このような考え方自体は、西洋哲学の伝統では古代ギリシアにまで遡るとされる。私は、拙稿「オウム真理教事件と宗教学——地下鉄サリン事件の10年後に」(鳥根大学福祉文化研究会『福祉文化』4、2005年)のなかで、宗教学の方法論的態度としての不可知論の立場を提起している。
- (5) この点に関しては、井上寛司による一連の示唆に富む論考があるが、なかでも一般向けの簡明な解説としては井上寛司「中世杵築大社の祭祀構造——大社祭神の転換と中世出雲国一宮制」(『古代出雲文化展図録』、鳥根県教育委員会、1997年)を参照されたい。
- (6) 出雲大社をも含む、出雲地方の神在祭の詳細に関しては、『鳥根県古代文化センター調査研究報告書6 出雲大社の祭礼行事——神在祭・古伝新嘗祭・涼殿祭』(鳥根県古代文化センター、1999年)を参照されたい。
- (7) 美保神社の青柴垣神事に関しては、古典的な研究として和歌森太郎『美保神社の研究』(弘文堂、1955年。『和歌森太郎著作集3 祭祀集団の研究』弘文堂、1979年、に再録)がある。近年の研究成果としては『鳥根県古代文化センター調査研究報告書2 鳥根半島の祭礼と祭祀組織』(鳥根県古代文化センター、1997年)を参照されたい。
- (8) 鳥根半島の小正月行事は、古くから民俗学者の注目するところであり、その研究報告としては、たとえば宮本常一『出雲八束郡片句浦民俗聞書』(アチックミュージアム、1942年。『宮本常一著作集39』未来社、1995年、に再録)、松平齊光『祭——本質と諸相』(日光書院、1946年。復刊＝朝日新聞社、1977年)等を挙げることができる。一方で、本講演で取り上げた松江市鹿島町御津の事例も含めて、鳥根県在住の民俗研究者による報告の多くは、山陰民俗学会編『山陰民俗叢書7 年中行事』(鳥根日々新聞社、1995年)に再録されている。
- (9) 山陰地方の荒神祭祀に関する在地の民俗研究者の報告の多くは、山陰民俗学会編『山陰民俗叢書6 家の神・村の神』(鳥根日々新聞社、1988年)に再録されている。また、講演で取り上げた松江市近郊の荒神祭祀の詳細については、拙稿「荒神祭祀論のための覚書——出雲地方を念頭に置いて」(『有馬毅一郎先生退官記念論集 社会科教育実践の新展開』鳥根大学教育学部社会科教育研究室、2002年)を参照されたい。
- (10) もっとも、生活様式の都市化ならびに若年層の人口減少に伴い、このような伝統的な祭礼行事の準備や執行が、参加者にとってはかなり重い負担として意識されるようになってきていることも事実である。
- (11) この点に関しては、拙稿「荒神祭祀論のための覚書」を参照されたい。
- (12) シーヴェシュラーヴェの詳細に関しては、蔵持不三也「祝火考——アルザス地方民俗調査ノートより」(『社会史研究』2、日本エディタースクール出版部、1983年)ならびに同『ワインの民族誌』(筑摩書房、1988年)を参照されたい。